

乳の学術連合の窓

特集1 牛乳を知り、正しく飲める子どもを育てる
～学校での食育実践をサポート～

特集2 牛乳がもつ食育教材としての魅力
学校関係者向けに食育研修会を開催

メディアミルクセミナー

急増する認知症の予防。食事の重要性とミルクの効用





- 3... [特集1] 牛乳を知り、正しく飲める子どもを育てる～学校での食育実践をサポート～
田中 博之 氏（早稲田大学教職大学院教授）
- 5... [特集2] 牛乳がもつ食育教材としての魅力
学校関係者向けに牛乳食育研修会を開催
- 6... 急増する認知症の予防。食事の重要性とミルクの効用
「メディアミルクセミナー」清原 裕氏（九州大学大学院教授）
- 7... ランチョンセミナー：乳和食による減塩運動を医学会とも連携して推進
第36回日本高血圧学会総会
- 7... 牛乳ヒーロー&ヒロインコンクール：11,605作品から入賞作品を決定
- 8... モノ離れ時代の需要創造 牛乳=カルシウム以外の情報訴求を
「酪農乳業マーケティングセミナー」菅家秀人氏（農水省）、大塚明氏（コーネル大学）
- 9... 全国95社が出展、約4000人が来場。販路拡大につながる有意義な機会に
Japan Milk Collection 2013
- 10... 食育視点の情報発信で価値を生み出す売り場づくりへ～食品小売向けセミナー～
Japan Milk Collection 2013
- 11... 22年ぶりに日本で開催されたWDS
過去最高の規模と内容で、成功裏に終わった
- 12... 「乳の学術連合」会員が各セッションに参加。国際的な学術交流が図られた
- 14... 高齢期の栄養におけるタンパク質の重要性と牛乳乳製品の果たしうる役割
～乳の学術連合共催セッション・ハイライト～
- 16... Jミルクの活動：9～11月の主な活動報告
- 18... 乳の社会文化に関する平成24年度学術研究発表が行われた
- 19... 今後のスケジュール・編集後記



乳の学術連合の会員の先生方に、ご登場いただくコーナーです。



牛乳食育研究会
乳の学術連合

牛乳を知り、正しく飲める子どもを育てる

～学校での食育実践をサポート～

田中博之氏（早稲田大学教職大学院教授）



田中 博之氏
早稲田大学教職大学院教授

特集1

乳の学術連合「牛乳食育研究会」では、牛乳を用いた食育の推進に向け、学校栄養職員対象の研修会や教材開発、教育レベルでの国際交流などに取り組んでいる。昨年10月には、学校での授業づくりに役立つ教職員向けハンドブック『伸びる食育・牛乳編』を「牛乳食育研究会」に所属する先生方の監修・協力により、Jミルクが発刊した。副代表幹事の田中博之氏に、研究活動の現状と今後の展開を聞いた。

食育推進は教職員の意識向上から

——牛乳を用いた食育を研究されるようになった経緯をお聞かせください。

田中：私は30年以上にわたって、小中学校の総合的な学習の時間の授業づくりを研究テーマにしてきました。その一環として5年ほど前から、牛乳を題材とした食育の実践も研究しています。これまで東京や大阪の小学校で、牧場での体験活動を含めた授業のあり方を検証してきました。今年度からは都内の幼稚園での実践研究を行っています。

食育は国の施策の一つであり、学習指導要領にも文言としては盛り込まれています。しかし、教科のように特定の授業時数は与えられていないので、学校ごとに時間を確保した上で指導してもらう必要があります。これまでの実践研究を通じて、学校の先生たちが立ち上がってくれないと食育は広がらないという問題意識を持ちました。こうした中で、牛乳食育研究会に参画しました。牛乳を用いた食育を推進するためには、授業や教材づくりだけでなく、栄養教諭や学校栄養職員などに牛乳を活用した食

育の意義を理解してもらい、学級担任と連携してもらうことが大切です。研究会では主に、こうした教える立場にある教員たちの教育や、国際交流を担当しています。私自身の研究テーマに合致するだけでなく、社会的にも価値のある活動をさせてもらっていると感じています。

授業づくりに役立つ実践的ガイドブック

——栄養教諭や学校栄養職員向けにはどのような活動をされているのですか。

田中：栄養教諭・学校栄養職員を主な対象とする「牛乳食育研修会」を年5会場で実施している他、全国学校栄養士協議会と連携した研修会も年6回開催しています。牛乳食育研修会では、牛乳を用いた食育の授業設計や教材作成を中心に、子どもへの声かけなど細かい授業技術も紹介しています。模擬授業形式のトレーニングもあり、授業や教材づくりのスキルアップという点では手応えを感じています。参加された先生方が研修成果を各学校に持ち帰り、管理職や学級担任を動かすことによって、食育の裾野が拡大することを期待しています。

昨年10月に発刊した栄養教諭・学校栄養職員向けハンドブック『伸びる食育・牛乳編』には監修者として関わらせてもらいました。「背を伸ばすライフスタイル」「牛乳で学ぶ食品流通」など6つの学習テーマに、指導案や板書例、黒板に掲示できるカード教材までをセットにした本格的な実践ガイドです。

牛乳を用いた食育は学校にとってはまだ新しい分野で、モデルとなる授業プランや教材は限られています。教材付きハンドブックという形で授業づくりの具体例を紹介することにより、食育の実践がより身近なものになると思います。また、牛乳の栄養や酪農に関する専門用語の解説や統計資料も充実しているので、先生方も正しい知識を自信を持って子どもたちに伝えられます。ぜひ多くの学校で活用していただきたいと考えています。

実践の質を高める国際共同研究へ

——先生は食育に関する国際共同研究や交流活動も担当されています。この分野での具体的な活動をご紹介します。

田中：まず現地での調査研究活動としては、これまでイギリスやフィンランドを訪れ、酪農乳業団体の研究や広報活動の現状を聞いています。イギリスでは現在、指定校での牧場体験を含む実践研究を進めており、食育に関する国際共同研究にも積極的です。今後、現地の小中学校を訪問して授業を視察し、事例収集を行う計画もあります。

昨年10月に横浜で開かれたWDSにも参加しました。学校での食育をテーマにした特別講演会の座長・講演者を務めた他、乳の学術連合のブースも展示し、研究活動を発信しました。海外の研究者や酪農乳業関係者との交流では、アメリカの酪農乳業団体の担当者と共同研究の



可能性を検討した他、各国の研究者も展示ブースを訪れてくれました。今後の国際共同研究の可能性を広げることができたのは一定の成果だと考えています。

食育は世界各国で行われていますが、海外ではNutrition Education（栄養教育）という位置付けが一般的で、日本のように命や食への感謝の気持ちを育てるといった道徳的な側面はありません。牛乳や酪農という題材は同じでも、学習内容や実践方法には違いがあるはずです。こうした点を共有しながら、互いの教育活動の質を高める共同研究ができればと考えています。

“牛乳の価値”体験的に学べる場を

——まとめとして、牛乳を用いた食育の意義と、研究会としての今後の活動の方向性を。

田中：国内外の最新の研究により、牛乳は生活習慣病や骨粗鬆症などの予防にも効果があることが明らかになっています。牛乳は成長期の子どもだけでなく、大人になっても摂り続けることが大切だということです。こうした生涯を通じた牛乳の価値を、「実感のある知識」として理解している人は非常に少ない。だからこそ、牛乳の栄養や社会的役割を正しく理解し、飲用習慣という行動化につなげる食育が必要なのです。

今後は、牛乳のさまざまな効果を、座学ではなく体験を通じて学べるような教材開発をしていきたいです。特に飲用習慣が途切れがちな中高生に対しては、牛乳を用いた調理実習や、医師や栄養士と連携した授業提案などが有効だと考えます。加えて、学校での実践の核になる人材育成という視点で、一般の先生方向けの研修機会も拡大できればと思っています。



田中博之氏
（早稲田大学教職大学院教授・牛乳食育研究会副代表幹事）
1960年、北九州市生まれ。大阪大学人間科学部卒業。大阪教育大学教授などを経て2009年4月より現職。専門は教育工学、教育方法学。近著に『カリキュラム編成論』（NHK出版・20013）、「学級力向上プロジェクト」（全宇書房・2013）などがある。

牛乳がもつ食育教材としての魅力 学校関係者向けに牛乳食育研修会を開催



特集2

開催日：平成25年10月24,25日 開催場所：東京都豊島区

牛乳を活用した食育を推進するため学校関係者（教諭・栄養教諭・学校栄養職員）向けの「牛乳食育研修会」を日本乳業協会・中央酪農会議の共催、文部科学省・農林水産省の後援、全国学校栄養士協議会の協力を得て全国5カ所(広島、仙台、大阪、東京、熊本)で開催した。学校関係の参加者は、38都道府県から127名が参加した。

その中から10月24,25日の2日間にわたり、東京で行われた研修会を抜粋して紹介する。

研修会初日には、「酪農乳業の現場とミルクサプライチェーン」と題し、埼玉県吉田牧場の吉田恭寛氏、タカナシ乳業の石田和人氏による講演。

また「食育授業に牛乳を活用する意義及び牛乳食育教材の活用と授業展開方法」と題し、武庫川女子大学の藤本勇二氏が講演を行った。

その後「牛乳食育教材を活用した学習指導計画の作成」をテーマにした、参加者によるワークショップを2時間半にわたり行った。

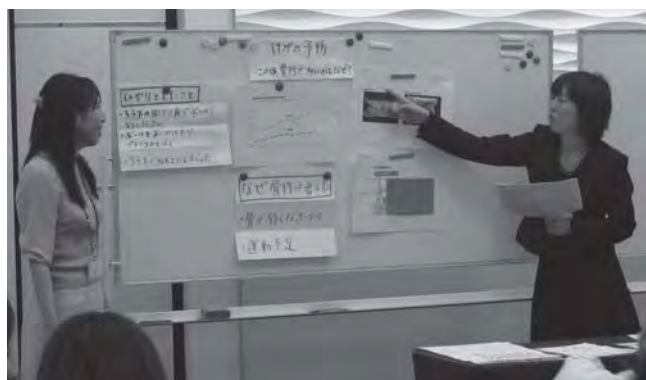
2日目は「小児科医からみた子どもの栄養、アレルギー対応とエピソードをういた実技演習」と題し、帝京平成大学の児玉浩子氏が講演。その後、藤本氏の「食育授業の進め方と工夫」と題した講演と前日から

取り組んだワークショップの発表を行い、2日間にわたるプログラムを終了した。

藤本氏の初日の講演を抜粋して紹介する。



ワークショップ風景



ワークショップの発表

「大切な事を大人が子どもに伝える」ではなく、子どもに気付かせ、学びを深くすることが大事

牛乳は、現代の日本人の生活にとって大事なだけでなく、教材としても非常に意味があると思います。

学校給食。私が食育をやっているのは、食にまつわる教材が子どもたちにとって非常に身近だからです。身近だから子どもたちがそこに問いかけや関わりを持つことができ、うまくいくと家庭にもつながります。

牛乳に関わるものは、歴史や人への感謝の心、もちろん命のこと、文化、加工食品などさまざまな教材への広がりがあり、栄養以外の部分も沢山あります。

例えば酪農家の話を聞いても栄養に関してはイメージが浮かばないでしょう。でも必死に牛と暮らしている生き方やキャリアの内容がぐっと入ってくると思います。つまりそういったものが牛乳には見えるのです。

少し工夫を凝らし、子どもの中の意識を引き出した上で、栄養教諭が登場する。この方が、ずっと学びは深くなります。



代表者による紙芝居朗読



講演を聞く参加者

急増する認知症の予防 食事の重要性とミルクの効用



開催日：平成25年10月8日 開催場所：大手町サンケイプラザ

Jミルクが主催する第34回メディアミルクセミナーが昨年10月8日に開催された。今回のテーマは、患者数の急増が大きな社会問題になっている高齢者認知症。福岡県久山町での50年以上に及ぶ疫学調査の結果、認知症の予防に牛乳・乳製品が大きな役割を果たすことが明らかになってきた。今回のセミナーでは調査主任の清原裕氏に、認知症増加の実態や予防のポイントについて語ってもらった。

福岡県久山町は、福岡市の東に隣接する人口8,300人余りの町である。住民の年齢層や職業構成、栄養摂取量などが日本の平均に近く、人口も安定しているため、長期的な疫学調査に適している。私たちは町の協力を得て、1961年から生活習慣病のコホート研究（大勢の人を長期にわたって追跡調査し、病気と要因の因果関係を調べる）を行ってきた。

当初は脳卒中を対象とし、1985年以降は認知症も調査対象に追加。65歳以上に対するスクリーニング調査を7年間隔、これまで計5回行っており、認知症患者の追跡率は99%以上になっている。認知症に関するコホート研究では、国内唯一の事例である。

久山町での認知症の有病率は、80年代から90年代にかけては7%前後で推移し、2000年代に入って急激に上昇している。最新の2012年調査では65歳以上の約18%（6人弱に1人）に上り、特にアルツハイマー病の有病率は、1985年調査時の1.4%から12%超にまで高まっている。

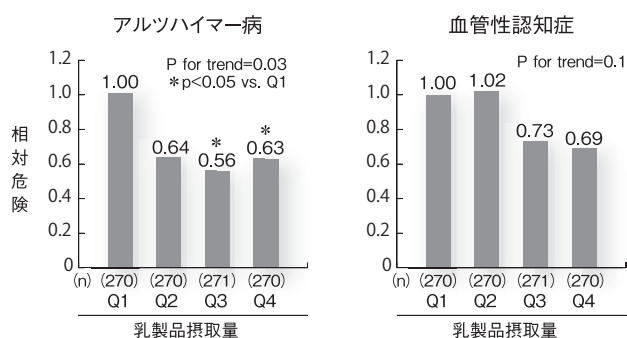
厚生労働省が昨年実施した認知症に関する共同研究に、私たちも参加した。研究班の集計では、全国の65歳以上の高齢者のうち、認知症の人は推計15%（2012年時点で約462万人）となった。これに久山町の正確なデータを当てはめると、現在の認知症患者数は500万人前後に上るとみられ、高齢者人口の増加を考慮すると30年後には1,000万人に達すると予想される。



清原 裕(きよはら ゆたか)氏
九州大学大学院医学研究院環境医学分野教授

医学博士。1976年、ソビエト連邦ロストフ国立医科大学卒。九州大学医学部附属病院内科講師を経て現職。福岡県久山町での疫学研究の主任を務め、関連著書も多数ある。

乳製品の摂取量別にみた認知症発症の相対危険（久山町男女1,081名、60歳以上、1988-2006、多変量調整）



認知症予防のための食事パターンについて聞き、その程度に応じて4等分して、スコアの最も低いレベルのグループをQ1、次に低いグループをQ2と振り分けた。調整因子：年齢、性、学歴、糖尿病、高血圧、総コレステロール、脳卒中既往歴、BMI、喫煙、飲酒、食事性因子（エネルギー、緑黄色野菜、淡色野菜、果物・果物ジュース、魚・肉の摂取量）

認知症の増加の要因として私たちが注目しているのは、糖尿病とその予備軍（糖代謝異常）である。久山町の高齢者1,000人以上を15年間にわたって追跡調査した結果、耐糖レベルが悪化するとアルツハイマー病や血管性認知症の発症率が上がることがわかってきた。

糖尿病との関連も踏まえ、認知症予防のポイントを指摘したい。一つは運動である。久山町での調査結果を分析すると、ウォーキングより負荷のある運動を週3日以上行う人は、行わない人に比べて、全ての認知症で20%、アルツハイマー病では40%ほど発症リスクが下がっている。

もう一つは、バランスの良い食事。特に注目すべきは牛乳・乳製品で、他の食品とは違って単品でも認知症の発症率と有意な関連が見られ、「牛乳・乳製品を多く摂るほど、認知症の発症リスクを下げる傾向がある」ことが明らかになった。

この他に増やしたほうがよい食品としては、大豆・大豆製品、緑黄色野菜、海藻類などがある。逆に、お米やお酒はやや減らしたほうがよい。認知症の予防には、「和食+牛乳・乳製品」という食事パターンが有効であると言えるだろう。

Jミルクでは、10月24～26日まで、日本高血圧学会総会にてランチョンセミナー、展示ブースを展開。

ランチョンセミナーでは、京都大学大学院講師の田中氏が「牛乳・乳製品・カルシウム摂取と血圧に関するエビデンス」と題し、講演。その後、料理家の小山氏が減塩運動を展開するため、牛乳を和食に使った「乳和食」を紹介した。

また、学会期間中に開催された日本高血圧協会理事会ブロック世話人・支部長会にて乳和食による減塩運動の取り組みを紹介し、乳和食弁当を提供し試食していただいた。出汁による減塩運動に加え、乳和食による減塩運動が日本高血圧協会医師、日本栄養士会とも連携して推進する方向が明確となった。



田中司朗氏
京都大学大学院 講師



小山浩子氏
料理家・管理栄養士



Jミルクでは、子どもたち一人ひとりが関心を持ち、子どもたちの「牛乳を大切」に思う気持ちを喚起することによる、国産牛乳乳製品の価値向上及び需要拡大を目的とし、小学生向け牛乳に関するポスターコンクールを6月から9月30日までの期間で行った。

応募総数は、11,605作品に上り、厳正な審査を行い入賞作品を決定。12月26日には表彰式を開催し、当日は各賞を受賞した35作品を展示。最優秀作品については、平成26年牛乳の日・牛乳月間・食育月間啓発資材のキャラクターに活用する予定。

入賞作品

- 牛乳ヒーロー最優秀賞：パワーアップ牛にゆうマン
埼玉県さいたま市立大宮別所小学校 3年 橋本 幸樹くん
- 牛乳ヒロイン最優秀賞：ミルクマグカップ
愛知県豊川市立小坂井東小学校 5年 小林 鈴歩さん
- 農林水産省生産局長賞：ミルクマン1ごう
福島県相馬市立桜丘小学校 2年 村田 天胤くん
- 独立行政法人農畜産業振興機構理事長賞：牛乳マン
大阪府岸和田市立八木北小学校 6年 松田 涼汰くん
- 公益社団法人全国学校栄養士協議会会長賞：ミルクくん
千葉県日出学園小学校 4年 吉村 笙さん
- 団体賞
西東京市立上向台小学校（東京都）
呉市立広小学校（広島県）
浜田市立三隅小学校（島根県）



牛乳ヒーロー最優秀賞
パワーアップ牛にゆうマン



牛乳ヒロイン最優秀賞
ミルクマグカップ



団体賞を含めた入賞者

“モノ離れ時代”の需要創造 牛乳＝カルシウム以外の情報訴求を



開催日：平成25年11月22日 開催場所：東京都

「ミルクは、東京で「酪農乳業マーケティングセミナー」を開催。はじめに「最近の酪農乳業情勢と今後の方向性について」と題し、農水省の菅家秀人氏が講演。続いて、大塚明氏が「食品SMの動向と乳製品販売戦略～モノ離れ時代の成長戦略～」と題した講演を行った。以下に大塚氏の講演内容を抜粋して紹介する。



市場のシュリンク(萎縮)への対応

今、スーパーマーケットの足元を見ると、100円ショップやドラッグストアまで食品を扱い、コンビニでも扱っている。食べるという意味においては、フードサービスもそうであり、GMS(ゼネラルマーチャングイズストア)、カテゴリーキラー等が、どんどん食品を強めてきている。その結果として、市場そのものがシュリンクし始めてきている。

これに対して、スーパーマーケット業界としては価格で戦う。あるいは地域密着。商品へのこだわり。そして専門店化ということ、同じ店舗の中でも進めていく必要が高まっている。また鮮度や、近いという意味での便利さを追求するなど、さまざまな戦いの方法をとらざるを得なくなってきている。

商品が持つ物語をお客様に伝える

昔は、年収や学歴など、お客様の存在を追求していけば良かったが、今は生活の状態をキャッチアップしないと、売りにつながらない状態になってきている。



大塚明氏
コーネル大学リテールマネージメントプログラム・オブ・ジャパンプログラム・ディレクター
1971年日本大学文理学部卒、イトーヨーカ堂入社
その後、株式会社ヤオコーにて、販売部長、人事部長、商品部長等を歴任し、1997年常務取締役就任。情報化推進担当兼IR広報室長兼コンプライアンス室長を担当
株式会社ヤオコー前顧問兼日本スーパーマーケット協会前専務理事。

日本人はいろんな意味で豊かになった。物不足のときには、量を確保することが商機。物余りになってきたら、質を追求するというのが、極めて大事になってきた。ではモノ離れの時代にはどうするかということ、その商品の持っている物語(ストーリー)をお客様に伝えて「ちょっと使ってみようかしら」と考えさせることが大事だと思う。

“牛乳＝カルシウム”のイメージからの脱却

スーパーマーケットにとって牛乳乳製品は、売上げの2～3%の構成比を持つ、とても重要な商品である。しかし、その中で牛乳そのもののマーケットは縮小しており、ヨーグルト、それも固形ではなく飲むヨーグルトへのシフトが進んでいる。また、豆乳や機能性飲料などの競合飲料の台頭も顕著化している。

メーカーを含めてだが、消費者は牛乳についていろいろな情報を知っているようで、案外知らない。

特に目立つのは、牛乳の栄養素はカルシウムだけというイメージを持っていること。牛乳にはカルシウム以外にも多くの栄養素が含まれているが、それらを具体的に挙げられる消費者は少ない。

商品の持つ物語を伝える意味でも、売り場での情報発信には工夫が必要だ。例えば、牛乳の栄養に関する説明に加え、「牛乳の殺菌は温度によってどう違うの?」「牛乳はなぜ紙パックなの?」といった情報を売り場で提示すると、買い物に来たお客さんがそれを持ち帰って、家庭で話題にできる。それが将来的な牛乳の消費につながるのではないかと思う。

全国95社が出展、約4000人が来場 販路拡大につながる有意義な機会に



開催日：平成25年10月30日 開催場所：パシフィコ横浜展示ホールC

ワールドデューリーサミットの開催期間に合わせ、10月30日(水)に、パシフィコ横浜(横浜市)にて、牛乳・乳製品に関する国内最大規模の展示・商談会『Japan Milk Collection 2013』をJミルクの主催で開催した。このイベントは、国産の牛乳・乳製品の価値向上と、需要創出を目的に、農林水産省をはじめ、(独)農畜産業振興機構、酪農乳業関係団体などの協力により開催した展示・商談会である。



国産牛乳・乳製品のPR、商談機会の創出で 日本製品の素晴らしさを世界へ発信

今回の出展者は95社で、新しい機能性を持つ商品、地域の特徴を活かした商品、こだわりの製法を持つ商品、ユニークなコンセプトのある商品など、862アイテムが展示された。

来場者は、食品メーカー、食品小売業、フードサービス業、栄養士、メディア、国内外の酪農乳業関係者など約4,000人。目標来場者数3,000人を大きく上回った。出展者、関係者を合わせると、約4,500人が一堂に会し、国産牛乳・乳製品の商談を展開する機会となった。来場者のうち約6割(2,199名)を小売・フードサービス等のバイヤーが占め、販路拡大につながる機会を提供することができた。

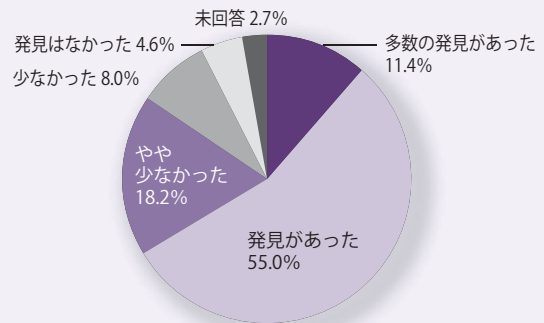
会場には、同じ横浜エリアで同時開催されていた「ワールド・デューリー・サミット(WDS)2013」からの来場者も多く見られ(577名)、日本各地の生産者と海外の食品関係者とを結びつける有意義な機会にもなった。

出展者の7割に200人以上の来場者

(アンケート調査より)

来場者を対象に行ったアンケートで「本展示・商談会で牛乳・乳製品の新たな価値(魅力、優位性、商品など)を発見できたか」を尋ねたところ、6割以上の方から「発見があった」と回答があった。

また、出展者に行ったアンケートでは、各ブースへの来場者の数は「200人以上」と回答した出展者が約7割と最も多く、多くの商談が展開された。出展者の9割が来場者数については「満足」と回答した。



参加者が選ぶ人気商品ランキング

今回出展された862アイテムから、来場者が、魅力的な商品を選ぶ投票を実施。その中で第1位に選ばれたのは、「甘酒」を牛乳とブレンドした「あまざけミルク」(日本酪農協同株式会社)。日本の伝統的な飲料と牛乳を組み合わせたアイデアと、飲みやすい甘味の感じられる味が評価され、最も多くの票を集めた。

参加者が選ぶ 人気商品ランキング上位5アイテム

出展者(都道府県)	商品名(種類)
1 日本酪農協同株式会社(大阪府)	あまざけミルク(清涼飲料水)
2 協同乳業株式会社(東京都)	東京牛乳(牛乳)
3 株式会社箱根牧場(北海道)	モッツアレラ・ティ・スーフアラ(ナチュラルチーズ)
4 栃酪乳業株式会社(栃木県)	トマトミルクレモン(乳飲料)
5 サツラク農業協同組合(北海道)	ピュアスラン(乳等を主要原料とする食品)

食育視点の情報発信で 価値を生み出す売り場づくりへ

～食品小売向けセミナー～



需要を創出し、顧客に近づく売り場づくりを

午後のメインステージでは、食品小売関係者向けの特別企画として、「食育視点による『売り場』価値創造の可能性」と題したセミナーが開催された。

マーケティング誌『販促会議』の中澤圭介編集長の進行で、上田隆穂氏（学習院大学経済学部教授）、大塚明氏（コーネル大学RMPJプログラムコーディネーター）、原宰氏（株式会社明治市乳事業本部市乳企画部部長）が登壇。食品小売の代表的な商材である牛乳を題材に、新しい価値を創造する売り場のあり方を議論した。

大塚氏は冒頭で、「日本の小売業は変革期にある。商品も顧客も外から集めるという発想ではなく、どれだけお客様に近づけるかという戦いが始まっている」と指摘。“もの離れ”の時代には、商品の価値を理解してもらう、商品を通じた体験を共有するといった取り組みを通じて需要を創り出す努力が必要だとし、「ICTを活用したりレーションシップ・マーケティングで、地域のお客様との距離を縮めることによってものを売る時代に入っている」と問題提起した。



大塚 明氏



上田 隆穂氏

これに対し上田氏は、消費者をライフステージごとに分類し、商品の本質的な価値と消費者の潜在ニーズをマッチングさせる情報を訴求する、新たな売り場づくりの事例を紹介。2012年に行った実店舗での実験成果を受け、2014年2月に新規の実証実験を予定していると話した。



今回の実験では、子育て層とシニア層をターゲットに、地域の管理栄養士と連携し、食育の視点を取り入れた情報発信に力を入れる。「栄養士が関わることで情報の信頼性が高まる上、地域の病院や学校との連携も強化できる。スーパーマーケットが、健康や食育を含めた地域生活のサポーターになることで、CSV（Creative Shared Value=社会利益とそれを実行する企業の利益を同時達成する）が実現できることを証明したい」と上田氏。牛乳・乳製品に関しては、旬の野菜と組み合わせたレシピ提案などを計画していると語った。

料理の“名脇役”としての価値訴求も有効

こうしたアプローチについて原氏は、「牛乳ほどライフステージ別のマーケティングに適した商品はない。直接飲用だけでなく、野菜とのコラボのような“名脇役”としての価値を発信することも有効だと思う」と評価した。さらに、「近年の研究で、牛乳は肥満や高血圧予防にも効果があることがわかってきており、購買動機拡大の起点になり得る。牛乳の販売促進が価格訴求だけでないことを証明してほしい」と実証実験への期待を示した。



原 宰氏



中澤 圭介氏

最後に中澤氏は、「2月からスタートする実験では、皆さんのビジネスにも水平展開できる成果が多く得られるはず。牛乳・乳製品が実験の中でどんな動きを見せるのが、期待を込めて注視していきたい」と議論をまとめた。

22年ぶりに日本で開催されたWDS 過去最高の規模と内容で、成功裏に終わった

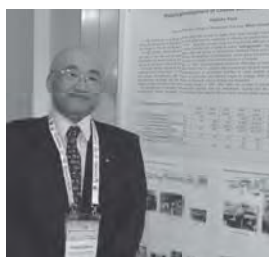


横浜で開催された「ワールド・デイリー・サミット(WDS)2013」は、関係各位の協力により、無事に終了。22年ぶりの日本での開催には、世界60か国の酪農乳業関係者、研究者が集まり、参加者は約2,200名と過去最高となった。



国際的な学術ネットワークづくりに成果

今回開催されたWDSにおいては、グローバル化が進む中で、日本の酪農乳業がどのようなポジションにあり、国内だけではなく世界の人々の食糧・健康問題にどのように貢献すべきかを、改めて考える機会となった。またこの様な中、国際的な学術ネットワークづくりに着手することが出来た。



ポスターセッション発表者
栢英彦氏



ポスターセッション発表者
高増哲也氏



乳の学術連合
展示ブース

世界の人々へ乳を届けるために日本の酪農乳業発展が必要

リーダーズフォーラム・Jミルク浅野会長講演より

現在、日本の牛乳乳製品消費量は年間約1150万トン。このうち国内生乳生産量は750万トンであり、不足する400万トンを輸入に頼っている。日本における大きな問題は、1996年に860万トンまでいった生乳生産量が年々減少し続けていること。生乳生産量が不足すれば輸入すればよいという考えもあるが、それは間違っている。

世界的な供給不足が懸念される今、輸入への依存を高めるとい選択肢はない。日本の酪農家の飼養管理、製品の品質管理の技術は高いレベルにある。国土は狭いが、酪農にしか適さない土地も存在する。そのような土地に酪農を広め関連産業を育て、人々の雇用を創ってきている。私達は国内の酪農を今後も健全に維持発展させる必要があり、このことは日本のためだけではなく世界の消費者のためでもあると考える。



リーダーズフォーラムで講演するJミルク会長浅野茂太郎



「乳の学術連合」会員が各セッションに参加 国際的な学術交流が図られた



開催日：平成25年10月28日～11月1日 開催場所：神奈川県横浜市



WDS(ワールドデイリーサミット)は、「リーダーズフォーラム」、「酪農政策・経済」、「酪農科学・乳業技術」、「子どもとミルク」、「家畜の健康・福祉」、「農場管理」、「栄養・健康」、「マーケティング」、「環境」、「食品安全」をテーマに5日間にわたりセッションが行われた。数多く行われたセッションから乳の学術連合会員が参加したセッションを抜粋して紹介する。

酪農政策 経済

セッション2：欧米とは異なる背景をもつ酪農地域における 牛乳乳製品市場、および酪農乳業の発展と将来の展望

Jミルク前田専務、フォンテラ Sarah Paterson を座長に行われたこのセッションでは、①アジアの国々の酪農産業の発展を、技術や金融面から支援する立場でスウェーデン、オランダから、②乳を利用する伝統的な食文化を持つ国としてトルコ、モンゴルから、③乳の利用が急速に普及している国としてインドネシア、中国、タイから、各国における現状、今後の展望などが報告された。



セッション3：酪農の役割と価値再発見の取り組み

名古屋大学大学院の生源寺眞一教授（乳の社会文化ネットワーク副代表幹事）が進行役を務めたパネルディスカッションでは、オーストラリア、ドイツ、イギリス、アメリカ、韓国、日本の生産者等が、パネリストとして登壇。『酪農の価値、持続的



な酪農経営を実現するための活動』をテーマに、各国の歴史的・地理的・経済的な条件によって異なる経験や実践情報を共有。様々な課題解決に向けた討議が行われた。



子どもと ミルク

- セッション1：子どもの栄養とミルク・子どもに
牛乳を与える科学的根拠
- セッション3：栄養以外の効果・学校における
乳と酪農の価値再発見

セッション1では、女子栄養大学の西教授が座長を務め、石田氏（女子栄養大学）が「日本の学校給食における牛乳の役割」、児玉氏（帝京平成大学）が「日本人乳児・小児でのカルシウムおよびビタミンD欠乏の問題」について講演を行った。

セッション3では、早稲田大学の田中氏が座長と「日本における酪農教育ファームの活動」と題した講演を行った。またニュージーランドにおける牛乳無料配布活動、ロシアにおける学校牛乳に関するイベントも紹介。最後に田中氏は「牛乳の価値を子どもたちに広めていくためには、学校や企業だけでなく、酪農家や地域の方、保護者の方、色々な人が協力し合い、知恵を出し合った力の結集、連携があって初めて成功する」と結んだ。



ランチョン セミナー

Jミルク主催ワークショップ

高血圧と減塩の現状と課題、 牛乳乳製品の和食への展開

札幌医科大学の島本学長を座長に安東氏（東京大学大学院）、小山氏（料理家・管理栄養士）の講演が行われた。日本における食塩過多の現状において減塩がいかに重要であるか。また、「和食」に牛乳乳製品を組み合わせ



ることで減塩ができることを紹介し、乳和食弁当を提供した。

- セッション3：サプライチェーンにおける化学汚染
物質を対象としたリスクマネジメント
の実践的アプローチ

食品安全

「日本における農薬等（農薬、動物用医薬品、飼料添加物）に関するポジティブリスト制度に対する酪農・乳業界の共同の取り組み」と題し、Jミルク丸山常務が講演。サ

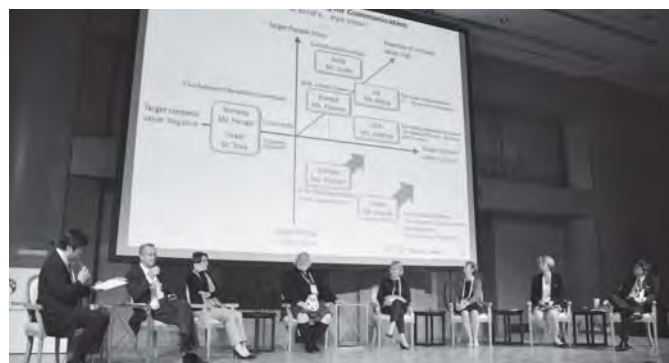
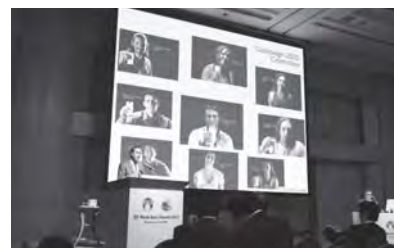


プライチェーンにおける製品の化学的ハザードを対象としたリスクマネジメントの関心の高さから、会場は満席となった。

マーケティング

- セッション2：革新的製品のコミュニケーション事例
- セッション3：新しいコミュニケーションのカタチ

セッション2では、フィンランド、日本、韓国、チリ、イギリス、それぞれの国における乳の価値を伝える成功事例を紹介。続くセッション3では、フランス、イギリス、イスラエル、アメリカ、ノルウェー、日本、インドのマーケティング戦略を各国15分で実例報告を行った。その後のパネルディスカッションでは、ソーシャルメディアも活用したJミルクの取り組みも関心を持って取り上げられ、特に「ビッグママ」のコミュニケーション戦略には注目が集まっていた。



高齢期の栄養におけるタンパク質の重要性と牛乳乳製品の果たしうる役割

～牛乳乳製品健康科学会議共催セッション・ハイライト～



乳の学術連合「牛乳乳製品健康科学会議」が主催する第26回国際学術フォーラムとの共催で実施された栄養・健康分野の特別講演会セッション4では、国内外の研究者が、乳タンパクの機能や生活習慣病の予防につながる効果、その摂取方法などに関する最新の研究成果を発表した。

ここでは、乳タンパク摂取の意義を時間栄養学の観点から分析した香川靖雄氏の講演と、折茂肇氏によるセッションの総括コメントを紹介する。

内容

栄養・健康

講演

- 「高齢者栄養におけるタンパク質の重要性」
柴田 博 氏 (人間総合科学大学教授)
- 「高齢期におけるサルコペニア予防のための乳製品摂取とレジスタンス運動」
Alan Hayas 氏 (Victoria University, オーストラリア)
- 「時間栄養学の立場から評価した朝食におけるタンパク質摂取の意義」
香川 靖雄 氏 (女子栄養大学副学長、教授)
- 「タンパク質の栄養と加齢：筋肉だけではなく生理機能に与える影響」
Naomi Fukagawa 氏 (University of Vermont, アメリカ)
- 「栄養不足を防ぐための高齢者の食事摂取基準 (DRI)」
森田 明美 氏 (甲子園大学教授)

パネルディスカッション

- 座長 折茂肇氏
(牛乳乳製品健康科学会議代表幹事・骨粗鬆症財団理事長、医師)
- 川原 貴氏 (国立スポーツ科学センター、医師)

パネリスト 講演者5名

閉会の辞 中村丁次氏

(牛乳乳製品健康科学会議副代表幹事、神奈川県立保健福祉大学学長、日本栄養士会名誉会長)

講演

時間栄養学の立場から評価した朝食におけるタンパク質摂取の意義

量や栄養バランスだけでなく 食事を摂る時間にも配慮が必要



香川 靖雄 氏
女子栄養大学副学長、教授

人間は、季節変動に対応する25時間周期の体内リズムで、一日の外界の変化を予測しながら代謝を行っている。例えば、午前4時頃になると就寝中に分泌されるメラトニン量が下がり、体の活力を上げるためのホルモン

The Importance of the Potential Role of Milk and Dairy Products in Elderly Nutrition and

高齢期の栄養におけるタンパク質の重要性と牛乳乳製品の果たしうる役割

Chairman: Hajime Orimo

Panelist:
Hiroshi Shibata, Alan Hayes,
Yasuo Kagawa, Naomi Fukagawa,
Akemi Morita
and Takashi Kawahara



の分泌量が増えてくる。

この代謝リズムを司っているのが体内時計である。私たちの身体には、日光を感じて一日のリズムを刻む中枢時計と、全身にある末梢時計という二種類の時計がある。中枢時計は光を感知することで、末梢時計は食事の栄養によって正しいリズムを刻む。

従来の栄養学では、同じカロリーや同じ組成であれば、栄養学的な効果は同じだと考えてきたが、時間栄養学の知見は異なる。マウスを使った実験の結果、同じ内容の食事でも、摂る時間を変えるだけで高血圧や糖尿病のリスクが変わることがわかっている。細胞内の末梢時計遺伝子の機能が損なわれ、代謝リズムが崩れるためである。

高血圧と骨粗鬆症の予防に 朝食と夕食での牛乳摂取が有効

体内のリズムを正常に保つためには、7時間前後の十分な睡眠時間を取り、食事を含めた規則正しい生活を送ることが重要だ。もちろん、食事の内容にも目を向ける必要がある。タンパク質と糖質が一緒になった、栄養バランスの取れた食事を摂ることによって時計遺伝子が正常に働く。特に、近年欠食率が上がっている朝食の改善は、1日1日の生活に関わるだけでなく、将来的な生活習慣病の予防のためにも不可欠の要素と言える。

牛乳のようなアミノ酸を含む食品を朝食に取り入れることは、時計遺伝子の作用を活性化させる上で非常に有効だ。心身の活力を高めるホルモンの分泌により知的活動も活発になるため、例えば子どもなら学校の成績が上がるといった効果も期待できる。また、牛乳のタンパクには血圧の上昇を防ぐ効果もあるため、朝食で牛乳を摂ることは高血圧の予防にも有効だ。

日本人の場合、牛乳を飲むのは朝食時のみという人が多いが、骨や筋肉をつくる成長ホルモンは就寝後1.5時間程度の間に集中して分泌されるため、このタイミングに合わせてカルシウムやタンパク質を摂ることが重要。骨粗鬆症の予防という点では、夕食時にも牛乳を摂ることをおすすめしたい。



パネルディスカッション・総括

確かなエビデンスに基づく情報を 食生活の改善に役立てて

Hayas氏の発表では、高齢期におけるレジスタンス運動（筋肉に抵抗をかける動作を繰り返して行う）と牛乳・乳製品の摂取が、サルコペニア（筋肉量の低下による筋力または身体能力低下）の予防に効果があることがわかった。健康状態に配慮しながら、無理のない範囲でレジスタンス運動を取り入れていくべきだと考える。



折茂 肇氏
牛乳乳製品健康科学会議
代表幹事、骨粗鬆症財団
理事長、医師

Fukagawa氏の講演でも紹介されたように、戦前のイギリスで行われたボイドオア研究を追跡調査した結果、小児期における牛乳摂取量と、高齢期の骨密度、身体バランス、歩行速度の間には正の相関が認められた。小児期に適切な食習慣を身に付けることは、成人期以後の健康にもつながるだけに、保護者を含めた食育の充実が求められる。

牛乳・乳製品の摂取は、高齢者だけでなくどの年代の食生活においても重要であり、とりわけ生活習慣病の予防に大きな役割を果たすことが本セッションでも確認できた。

今回のセッションで発表された数々の学術データを、乳業関係者だけでなく広く一般社会に公開し、食生活の改善に役立ててもらうことが重要だ。私たち乳の学術連合としても引き続き、確かなエビデンスに基づく情報発信に取り組んでいきたい。

Jミルクの活動：9～11月の主な活動報告



平成25年9月1日から平成25年11月30日まで主な推進業務及び委員会等の開催

主な推進業務（9～11月）

【企画情報グループ関連】

- 災害等支援環境整備事業関連
 - ・「自給飼料放射性物質検査支援事業」の推進
 - ・事業進捗状況ヒアリング実施
- 生乳需給安定対策事業関連
 - ・「第3四半期までの需給見通しと当面する課題」について協議・検討
 - ・需給・価格関連データ（HP）の更新
 - ・「乳製品（バター・脱脂粉乳）に関するユーザー調査」の実施
- ポジティブリスト対応推進事業関連
 - ・平成25年度定期的検査（11/12～12/20）
- 生乳検査精度向上対策事業関連
 - ・生乳検査精度管理認証
 - 26年4月1日新規認証、認証更新受付、審査中
- 共通課題の検討
 - ・乳製品（バター・脱脂粉乳）の適正在庫指標の検討



青森県栄養士会乳和食セミナー



牛乳デビューはいつにする？



牛乳は健康と家計の味方！

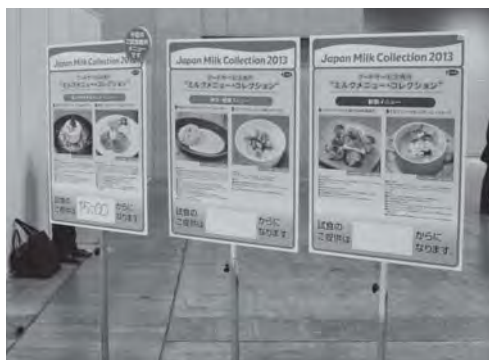
主な推進業務（9～11月）

【普及グループ関連】

- WDS2013 関連（10/28～11/1）
 - ・「わが国酪農乳業の紹介映像」制作
 - ・ランチョンセミナー「高血圧と減塩の現状と課題、牛乳乳製品の和食への展開」の実施
 - ・健康・栄養の特別セッション
 - ・「乳の学術連合」展示ブース
- 国産牛乳・乳製品展示会「Japan Milk Collection 2013」（10月30日 横浜）開催
- 小売店舗等での価値訴求活動の検討
 - ・第2回牛乳乳製品新規利用促進検討会議（9/13）
- 牛乳ヒーロー&ヒロインコンクールの実施
 - ・11/4に最終審査会、12/26に表彰式
- 26年度委託研究公募
- 業界向け情報提供リーフレット「牛乳は健康と家計の味方！」、「牛乳デビューはいつにする？」制作配布
- 平成25年度「牛乳乳製品に関する食生活動向調査」

【総務広報グループ関連】

- メディア広報対策
 - ・9月30日 「第33回メディアミルクセミナー：牛乳デビューはいつにする？離乳食における牛乳の位置づけ」ニュースレター制作・発信
 - ・10月2日 報道基礎資料「値上がりする食品 節約しながら栄養をしっかりと取る～牛乳の賢い使い方～」を制作、メディア関係233社に発信



JMC会場での調理実演&ミルクメニュー試食提供コーナー

委員会・研究会・イベント等の開催（9月）	
業界向けエビデンスセミナー（札幌）	9月3日
内容 ①「高血圧と減塩」 ②「ミルクでおいしく減塩 乳和食レシピ」	
乳の社会文化ネットワーク 幹事会	9月6日
第1回需給取引専門部会	9月10日
内容 ①本年度事業の進捗状況と下期の事業 ②生乳検査精度認証規程改定	
生乳検査精度認証特別委員会	9月11日
内容 ①10月1日認証施設の審査 ②認証審査料金改定に向けた協議内容の報告	
第2回マーケティング委員会	9月13日
第1回普及専門部会	9月19日
栄養士、食生活改善推進員向け減塩支援研修会（宮城）	9月21日
乳和食のデモと調理実習	
牛乳食育研究会 幹事会	9月22日
栄養士、食生活改善推進員向け減塩支援研修会「乳和食クッキングセミナー2013」（大分）	9月25日
牛乳食育研修会（広島）	9月26日、27日
内容 ①酪農乳業に関する生産現場の講演 ②小児科医から見た栄養とアレルギー対応 ③牛乳食育教材の活用と授業展開方法 ④牛乳食育教材を活用したワークショップ、発表	
第2回生乳検査精度管理委員会	9月27日
内容 ①10月1日認証施設の報告 ②認証審査料金改定の協議 ③生乳検査精度管理認証取得促進支援事業の申請状況と課題の報告	
牛乳乳製品健康科学会議 幹事会	9月30日

委員会・研究会・イベント等の開催（10月）	
第3回ポジティブリスト委員会	10月1日
牛乳食育研修会（仙台）	10月3、4日
第34回メディアミルクセミナー	10月8日
急増する認知症の予防：食事の重要性とミルクの効用	
牛乳食育研修会（大阪）	10月17、18日
栄養士、食生活改善推進員向け減塩支援研修会（秋田）	10月18日
「高血圧と減塩」「牛乳摂取とメタボ」 乳和食レシピのデモ。乳和食弁当試食。	



酪農乳業セミナー（福岡）



フードサービス向けミルクメニューの試食（JMC）

委員会・研究会・イベント等の開催（10月）	
第3回需給委員会 （需給見通し10/25公表）	10月18日
栄養士向け情報開発研究	10月21日
牛乳食育研修会（東京）	10月24、25日
日本高血圧学会ランチョンセミナー、 及び減塩サミットブース出展	10月24-26日

委員会・研究会・イベント等の開催（11月）	
栄養士、食生活改善推進員向け減塩支援研修会（青森） 乳和食のデモと調理実習	11月4日
第5回牛乳食育研修会（熊本）	11月7・8日
『牛乳を科学する』～シニアの健康と牛乳～（山形）	11月9日
全国大学保健管理研究集会（岐阜）	11月13、14日
業界向けエビデンスセミナー（大阪）	11月15日
講演 「血圧と減塩」 「乳和食」	
酪農乳業マーケティングセミナー	11月22日
内容 ①「最近の酪農乳業情勢と今後の方向性について」 ②「最近の食品小売業の動向と牛乳乳製品の販売戦略」	
酪農乳業セミナー（26日：岡山、27日：福岡）	11月26、27日
内容 ①「最近の酪農乳業情勢と今後の方向性について」 ②「今後の国際的な穀物・食糧市場の動向について」	
『牛乳を科学する』～健康寿命を延ばそう～（群馬）	11月30日

乳の社会文化に関する平成24年度の 学術研究発表が行われた



開催日：平成25年12月14日 開催場所：大手町 サンケイプラザ

乳の社会的文化的価値について研究を進めている「乳の社会文化ネットワーク（代表幹事：和仁皓明氏）」の平成24年度学術研究報告会が東京で開催された。

平成24年度「乳の社会文化」学術研究・発表者一覧（敬称略）



世帯における牛乳・乳製品の
消費習慣と利用方法

～子育て世帯の食卓に注目して～

（独）農業・食品産業技術総合研究機構
中央農業総合研究センター契約研究員

小野 史



日本における
チーズ製造の歴史的発展

（前）日本大学生物資源科学部非常勤講師

栢 英彦



牛乳宅配事業が
牛乳飲用習慣の形成に及ぼす
影響要因の国際比較研究

大阪府立大学経済学部教授

上野 恭裕



安心・安全な牛乳生産の
免疫技術向上を目指した
プロバイオティクス利用の
社会的貢献

東北大学大学院農学研究科准教授

北澤 春樹



戦後日本における乳製品の
普及過程に関する社会学的分析
～教育現場から家庭・地域へ介入する食教育の再検討～

熊本大学教育学部講師

増田 仁



日本の学校給食における
牛乳利用の歴史的評価

長野県短期大学教授

中澤 弥子



牛乳乳製品の飲用習慣形成へ
与える新要因としての
身体運動・スポーツの役割

北海道大学大学院教育学研究院教授

水野 眞佐夫



乳をめぐるリスクコミュニケー
ションの現状と課題

（乳をめぐるリスクコミュニケーションツールの開発）

東京大学大学院農学生命科学研究科准教授

細野 ひろみ



中国内モンゴル自治区における
乳製品名称と乳製品加工システ
ムの地域性に関する研究

～牧畜業の第六次産業化への日本モデルの導入～

奈良女子大学文学部教授

武藤 康弘

各地においてブロック会議を開催

開催地	開催日時	開催都市	開催場所
札幌会場	3月20日(木) 13:30~16:00	北海道札幌市	T K P札幌ビジネスセンター赤れんが前
仙台会場	3月25日(火) 13:30~16:00	宮城県仙台市	T K P仙台カンファレンスセンター
東京会場	3月18日(火) 13:30~16:00	東京都千代田区	K K Rホテル東京 孔雀の間
名古屋会場	4月3日(木) 13:30~16:00	愛知県名古屋市	名鉄ニューグランドホテル
京都会場	4月4日(金) 13:30~16:00	京都府京都市	京都府立総合福祉会館(ハートピア京都)第5会議室
岡山会場	4月8日(火) 13:30~16:00	岡山県岡山市	ピュアリティまきび
福岡会場	4月9日(水) 13:30~16:00	福岡県福岡市	八百治博多ホテル

今後のスケジュール 平成26年2月1日~平成26年3月31日までの会議・行事の開催予定を掲載致します。

	開催日	場所	内容	講師(敬称略)
牛乳乳製品健康科学会議 学術研究選考委員会	2月3日	Jミルク会議室	平成26年度学術研究公募選考	
第2回普及専門部会	2月6日	Jミルク会議室	平成26年度普及関連事業計画について 他	
栄養士向け減塩支援セミナー	2月9日	広島県	高血圧と減塩に関する講演。乳和食調理実習と試食	日下 美穂 小山 浩子
栄養士向け減塩支援セミナー	2月15日	岩手県	高血圧と減塩、牛乳とメタボに関する講演 乳和食調理デモと弁当試食	佐藤 一俊 小山 浩子
第5回理事会	2月19日	Jミルク会議室	平成26年度事業計画・収支予算	
第4回牛乳食育研究会 幹事会	2月22日	Jミルク会議室	平成26年度活動内容 他	
第2回酪農乳業セミナー	2月26日	東京都	平成26年度国の酪農乳業への政策等 平成26年度生乳及び牛乳乳製品の需給見通し 平成25年度Jミルク調査分析結果の説明会	
栄養士向け減塩支援セミナー	3月1日	佐賀県	高血圧と減塩に関する講演。乳和食調理実習と試食	野出 孝一 小山 浩子
臨時総会(事業計画)	3月6日	東京都	平成26年度事業計画・収支予算	
食事療法学会ランチョンセミナー	3月8,9日	長崎県	乳和食による減塩メニュー紹介と病院食への展開	西村 一弘 小山 浩子
業界向けエビデンスセミナー	3月14日	福岡県	「減塩と高血圧の関係」「乳和食のすすめ」	土橋 卓也 小山 浩子
第2回牛乳食育研究会 総会	3月16日	Jミルク会議室	平成25年度活動報告、平成26年度活動内容 他	
牛乳乳製品健康科学会議 学術研究発表会、総会	3月23日	東京都	平成25年度学術委託研究発表会(18件)及び総会	

※上記は予定であり、日時・場所・講師等変更する場合があります。

編集 後記

- 明けましておめでとうございます！今年は、牛ではなく、午年。ウマは力強く、走りも早い生き物。新年を迎え、文字通り酪農乳業界が力強く、変化に素早く対応できるようにしたいものです。
- 「食」をめぐる環境変化がはげしい中、「価値の共感」がいただけますよう今年も頑張っていきたいと思っていますので、旧に倍しましてご鞭撻、ご支援をお願いいたします。(T.I)



j-milkレポート vol.11 発行日/2014年1月

編集・発行/ 一般社団法人 **Jミルク**

住所:〒104-0045 東京都中央区築地4丁目7番1号 築地三井ビル5階

TEL.03-6226-6351 FAX.03-6226-6354

ホームページアドレス <http://www.j-milk.jp/>